

子どもが主人公の

学級づくり

東松山市立唐子小学校 小磯 政行

一 はじめに

この原稿を書いている最中に、『三・一一』を迎えた。あれから三年が経った。私は、学級通信に次のように書いた。『三月十一日…、あの未曾有の大震災が起きた三・一一から今日で九三年。大地震、津波、原発事故…。テレビに映し出される映像に今も胸が締め付けられる。しかも、未だ遅々として進んでいない復興の様子を被災地から報道している。仮設住宅で不自由な生活を強いられている方々もまだまだ多い。私は、この三年間、何を考え、何をしてきただろうか？計画停電で信号機が消えた朝、車にひかれそうになりながら、交差点で交通整理をした。通学班で歩いてくる子どもたちの笑

顔に、そして、いっしょに歩いてきてくれた保護者の方に逆に励まされた。また、計画停電で、真つ暗な部屋の中で、寒さに震えながら毛布を膝にのせ、懐中電灯を頼りに、久し振りに手書きの通信を書いた。ご飯の上のつた一個だけの肉団子。しかし、みんなで給食を共に出来る幸せを当時三年生だった、今の六年生の子どもたちと語り合った。結局、今、自分出来る事を精一杯やることしか思いつかなかつた。当時、教育に関わる一員として、改めて子どもたちが未来の希望であることを再確認し、この仕事に携われる幸せをかみしめた。しかし、何をすべきなのか未だに考え続けているように思う。今年も、地震の起きた午後二時四十六分に黙祷し、無念だったろう多くの

方々のご冥福を祈る。祈ることしかできない己の無力さを感じながら…。『平和で民主的な未来を創る主人公である子どもたち。その子どもたちを育てるために、どんなことが、学級づくりのポイントになるか考えてみたい。』

二 子どもとつながる・子どもをつなげる

常に、子どもとつながり、子ども同士をつなげることを意識しながら実践を進めていく。例えば、朝と帰りに子どもたちとハイタッチをする。ハイタッチの良い所は、直に触れ合うことが出来ることとハイタッチしながら、「元気かな？何か心配な事があれば言ってみてね。」「休み時間に、縄跳びの練習をいっしょにしようね。」「今日は、授業中の発言が光っていたね。」などと一人ひとりに声をかけることができることである。もちろん、子どもと私のハイタッチだけではなく、「今日は、三人の友だちとハイタッチしてから帰ろうね。」などと語りかけ、子ども同士のハイタッチへと広げていく。朝の出欠確認や健康観察も、子ども同士をつなげる実践になり得る。最初は、教師が一人ひとりと呼名するが、だんだ

んと子どもたちが、友だちの名前を呼ぶようにし、最後には、班会議を開いて、みんなの前で班の仲間の健康状態を発表するようにしていく。このように考えれば、様々な場面で子ども同士をつなぐ機会はある。

子どもたちは、アイドルグループの影響であろうか、ジャンケンが大好きである。王様ジャンケンから始まって、後出しジャンケンへ。王様に勝つように出すのは簡単だが、負けるように出すのは苦労する。班で何を出すか決める集団ジャンケンは、話し合い指導の第一歩にもなる。

集団遊びは、楽しいだけのレクリエーションではない。学級に前向きなトーンをつくりだしたり、リーダーや課題を持つ子ども、子どもたちの様子をつかむこともできる。また、学級の課題が見えることもある。場合によっては、遊びの中で教育的な価値を教えることもできる。

私は、学級開きの日から、集団遊びや手遊び歌を数多く取り入れて、子どもとつながり、子ども同士をつなげていく。例えば、班毎に並ぶこと一つをとって、四月から生まれた順番に並んで「らん。」

などという条件を付けて並ぶ競争遊びをする。すると、子ども同士で交流が始まる。つながるには、まず、相手の事を知ることが必要なのである。外遊びも、ボール運動ばかりではなく、Sケンや「網投げた」のような体と体をぶつけ合って楽しむ昔遊びを子どもたちと一緒にいき、その楽しさを体感させることが大切である。

子どもの居場所をつくりたい、子ども同士のつながりを深めたい、子どもたちが持っている世界を他の子に開いていきたいと思いい、学級内クラブを子どもたちに提案した。

- ① 三人以上で作る。
- ② ポスターを書く。(クラブ名、やること、メンバー、リーダー、メンバーの募集)
- ③ 新しいクラブは、いつ作ってもよい。朝や帰りの会で発表する。
- ④ いくつ入ってもよい。
- ⑤ 出入り自由。
- ⑥ 朝の会で、やることをお知らせする。帰りの会で、活動報告をする。
- ⑦ 何をしてもいいが、人に迷惑をかけない。
- ⑧ ルール作りが必要な時には、クラブで会議する。

早速、子どもたちは、嬉々としてクラブを作った。「こまクラブ」「工作クラブ」「サッカークラブ」「折り紙クラブ」「ドッチボールクラブ」、そして、後に「クイズクラブ」や「こわい話クラブ」ができた。

三 トラブルこそチャンス

最近、トラブルが学級で起きると、当事者だけを呼んで、お説教しておしまいという指導(?)をよく目にする。しかし、これは、「もぐらたたき」にしかならず、多分、一年間通して、トラブルに悩まされ続けることになるだろう。問題は、関係性の中で起きているのだから、事実と行為の裏にあるものをみんなで見み解いていく必要がある。もちろん、第一に、人権を侵された子を守ることが大切なこととは言ってもない。そして、双方の思いも聞き取りながら、確かめられた事実を黒板に書いていく。「再現フィルムで巻き戻すよ。」などと言いつつ、みんなでもう一度、事実関係やその時の思いなどを演じてみるのもよい。こまこまで、事実を確認出来れば、この後、どうすれば良かったかなど、これからの対策

や方針は自ずと明らかになる。

四 話し合いながら、子どもと一緒に学級をつくる

どの教室にも学校教育目標と並んで、学年目標や学級目標が掲示してある。しかし、具体的に何をすればよいのか分らないし、決めた(?)だけで、成果と課題は?と首を傾げたくなるものが多い。つまり「絵に描いた餅」状態である。そこで、みんなで少し生活した後、学級目標を決めることにした。子どもたちが主人公の学級をつくるのだから、子どもたちと一緒に決めたいと考えた。しかし、低学年の担任の場合、子どもたちに「どんな目標にする?」と聞くのは酷である。そこで、「去年のクラスで、楽しかったなあと思うのは、どんなこと?逆に嫌だなあと思ったことは?」と話し、紙に書いてもらう。その子どもたちの声をもとにして、目標を文章化する。もちろん、子どもたちと再度話し合って承認してもらおう。そして、重要なのは、学期末に子どもたちと学級目標について話し合うことである。具体的な理由を挙げながら、目標のうち、達成できたのはどれで、

課題に残ったのはどれという風に。そうすれば、次の学期には、こんなことを重点的に取り組んでいこうということになる。

蛇足だが、班替え(席替え?)を行う時も同様である。今のクラスや班の様子を子どもたちと話し合うことで、新しい班をつくる目標や方法が見えてくる。

また、例えば、私のクラスでは、クラスづくりの最初の段階で、帰りの会で、よいこと自慢をするコーナーがある。ここでは、班会議を持つてから全体に発表することになっている。場合によっては、全体の場で意見を言い合う場面も出てくる。個人の意見だけで、「いい子ちゃん印」をつけていくといった実践をよく耳にするが、やはり集団的な討議を経て行わないと意味がないと思っている。集団的な討議が行われると、それに対して異論も出てくるし、またさらに、その行為に対して深い意味付けが行われることも多いからである。

五 授業で大切にしたいこと

「先生が、ハイ!って言ってパチン!と手をたたいたら、何をしていても止め

て、先生のこの美しい、どうだい?ツヤツヤしてるだろう...口元を見る。どうしてかって言うよね。これからみんなで楽しいクラスを作っていきます。もちろん先生もいっしょに。でも、最初は先生の言うことを一言も聞き洩らさないでほしいんだ。みんなにとって大切なことを言うからね。何秒で出来るかな?少しづつ短くしていこうね。この約束、実は『二のーかしくなる大作戦 その一』なんだよ。賛成してくれる人は大きな拍手!ーはい、ありがとう。みんなが賛成してくれたので、これから作戦を開始します。じゃあ、練習をしようか。はい、隣近所の人と嘘話して...ゴニョゴニョ...ハイ、パチン!」

子どもたちが帰ってから、黒板に書いた。『八時二十分のチャイムで、みんながサツと座って、静かに先生を待っている事が出来るかな?みんなができたなら、ごほうびがあるよ』

翌朝、職員室を一番で出る。『大工のキツキさん』を大きな声で歌いながら階段を上がる。二のーのドアの前で、「これから、先生が教室に入りま〜す。二のーの子たちが、みんなきちんと座っていたら嬉しいな〜!(ガラツ)おはよう!」

「おお！何て素晴らしい！あんまり静かだから、みんな、どっかに脱走しちゃったかと思つたよ。ああ、良かったあー」「ハハハハ：」「では、ごほうびね。これは、黄金のリンゴがなる樹です。今朝、みんながしっかりと席に着いていられたから、早くも一つ、大きな黄金のリンゴが実つたよ。（と言つて、金の折り紙で作つたりんごを樹のど真ん中に貼る）パチパチパチパチ…。このリンゴが三つ揃う度にみんなでお祝いのレクをすることができます。イエーイー！でも、気を付けてね。油断すると、つまり、りんごに書いたことが出来なくなると、このリンゴは腐つて落ちてしまいます…この黄金のリンゴの樹は、前の壁の上のど真ん中に貼つておくね」

「先生、ノートがない…」（ノートを忘れたが正しい）「わかつた。この『先生の愛情ノート』を使いなさい。先生の愛をいっぱい感じながら書いてね」ノートを忘れたら、怒らず、各教科ごとに用意してあるノートを貸すことにしている。子どもが忘れても安心して学習できるように。発言も子どもたちと話し合つて、学習目標として設定した。「質問も一回に入るよ。だって、誰かが質問したこと

によつて、他の子どももつとわかるようになるからね。そして、まちがえましょう！間違ひの中にこそ本当のことが、宝物が隠されているのだ！ノーベル物理学賞を貰つた偉い人も言っている」

最近、「授業規律」だけが、強調されているような気がする。しかも、授業規律確立の名のもとに、過程を考えずに、「こうあるべき」と声高に管理しようとしている。しかし、この流れで一年間を過ごすと、子どもたちは自分の考えを持たなくなるばかりか、学習に対する意欲を失うことになるのは明らかである。授業規律も、一つ一つ、その意味を考え、子どもたちの発達段階や学級の状況を考慮しつつ、やはり、子どもたちと話し合つて、合意しながら取り組みを進めるべきである。そうして、一年経つてみて、やつと学級のルールとして定着するものなのだと思ふ。

子どもたちは今、学ぶ意味を求めていると感じる。「学力向上」の大合唱のもと、プリント学習ばかりで、学習意欲を奪い取られている子どもたち。しかし、学ぶ意味を掴んだ時には、自ら考え、自分の世界をひろげ、他とつながろうとする。そのパワーは計り知れない。だとするな

らば、教師は、常に、子どもたちと共に学ぶ意味を考えながら、授業を創造していかなければならないと考えている。

六 どう取り組み問題に どう取り組みか

いじめを苦にした自殺が続けて報道された。昨年、施行された「いじめ防止対策推進法」。いじめ問題は、厳罰化では決して解決しない。いじめ問題解決のポイントは、次の四点であると考えている。

①学級のスタートから、「いじめ」の指導を開始する。「いじめはどこでも起こりうる」と考え、例え今の学級で、いじめが確認されていなくても、いじめについて子どもたちといっしょに学習する事が大切である。そのことが、いじめの予防にもつながると考える。また学級分析を行い、クラスの交友関係やグループを学級地図（*注1）にして、それぞれの力関係を捉えておく必要もある。

②「加害者」対「被害者」の図式で捉えない。

もちろん、第一に、「いじめられている」子の人権を守ることが大切である。しかし、「いじめられている」子も何らかのストレスや発達上の課題を抱えて苦しんでい

る。だから、「加害者」に厳しい罰を与えることでは、いじめ問題を解決することはできないと考える。いじめ問題を扱った「紙上討論」(*注2)など、みんなで作る場を設けて取り組むことが必要である。

③「いじめ文化」を超える「学校・学級文化」の創造を

子どもたちは、好んで「いじめ」をしている訳ではない。友だちと仲良く遊んだり、おしゃべりしたり、または、力を合わせて行事に取り組み、充実した学校生活を送りたいと願っているはずである。だとするならば、学校・教師は、子どもたちが、いきいきと目を輝かせる活動の場を子どもたちと一緒に創造していくことが求められているのではないか。

④体罰や力で抑える学校から、子どもたちが主人公の学校へ

いじめはもちろん、子どもたちの中で起きた「事件」を根本から解決できるのは、子どもたち自身である。そのためには、子どもたちが話し合い、解決できる力を育てていかねばならない。集団の協議にもとづいた「学校づくり」をすすめる際に、体罰(暴力)のない学校を目指すことが、まずその第一歩である。力や

威圧で抑える指導ではなく、子どもたち自身が、声を上げて、課題や問題に取り組める体制を作ることが必要である。例えば、生徒会や児童会活動を中心に進めることである。そして、授業や行事の中で、子どもたちの声を聞きながら、子どもたちが中心になって取り組んでいくといった経験を多く積ませることが大切である。子どもたちは、行事をみんなで成功させるといった達成感を得る中で、自信と力をつけていく。自ら物事に取り組み、課題や問題を解決していくという思想やスキルを身につけていくのである。子どもが主人公の学校を目指すことは、いじめを克服して、次世代を担う平和で民主的な人格を育てる学校を創ることにつながっているのだ。

七 一年間のまとめをどうするか

私は、ここ数年、子どもたちに自身を表現する力をつけてもらいたいと考えて、一年間の実践を組み立てている。その集大成として、その年度の最後の授業参観で、劇やミュージカルを発表することになっている。例えば、四年生では「二分の一人式」と称して、将来の夢を一

人ひとりが劇の中で発表する。保護者も、子どもたちの成長を実感し、感動の涙を流してくれる。

また、子どもたちと行う学級最後のまとめの会(今年度は、「旅立ちの会」とネーミングした)では、一人ひとりがクラスの一年間を大きなカルタ(四つ切画用紙)で作り、校庭いっぱいには撒き、班対抗のカルタとりを行った。子どもたちは、校庭を元気にいっぱい走り回って、カルタとりを楽しみながら、この一年間を振り返っていた。

*注1「学級地図」…学級の子どもたちの関わりを図に表して捉え、指導に役立てる。趣味でのつながりや交友関係、または、学級での力関係を表す。

*注2「紙上討論」…あるテーマについて、子どもたちに自分の考えや意見を書いてもらい、学級通信などに載せて、みんなで見合う。(その際、無記名にするなどの配慮がひつような場合もある)必要があれば、読んだ感想や他の考えに対する意見などを再度書かせて載せていく。そうすることによって、テーマについて学級での世論を作りだす。